コラージュ制作により児童の自己認識を深め自己表現力を高める試み

Development of Expressing Children's Emotion during Collage Works

大澤久乃* ・ 宮本正一**

Hisano OOSAWA* ・ Masakazu MIYAMOTO**

岐阜大学教育学部研究報告 ＝教育実践研究＝

第2巻 別刷

2000年3月

コラージュ制作により児童の自己認識を深め自己表現力を高める試み

Development of Expressing Children's Emotion during Collage Works

大澤久乃*　・　宮本正一**

Hisano OOSAWA*　・　Masakazu MIYAMOTO**

The purpose of the present study was to examine the effects of collage works in the class on the adjustment of two students. They had chances to do the collage work four times; the first and second were in their class, the third in pairs, and the last in their home. The collage works had positive effects upon their adjustment in their class.

Key words: collage work, art therapy, social adjustment
キーワード：コラージュ療法，芸術療法，社会的適応

誰もが学級の中で「自己」を「伸び伸びと表現したい」，「友達に認められたい」と願って生活している。しかし，実際には，「家庭内で表現する自己」と「学級内で表現する自己」に相違があったり，他者評価に合致するように役割演技をしたりするなど，学級内で素直に「自己表現」できないまま「自分は，本当は～なのに」という思いを持ちながら，学校生活を送っている子ども達も少なくない。また，家庭内でさえ「伸び伸びと自己表現」できない子どももいる。現代の子どもは親の前ではよい子を演じているとも言われる。

このような何らかのフラストレーションや葛藤が自己理解の不足・歪みを導くことによって，再び新たなフラストレーションや葛藤を生み，更にそれを無意識の中に抑圧することが，多くの子ども達を不適応に陥らせる要因の1つと考えられる。外的行動に現れる不適応の徴候は，情緒不安定，劣等感，孤独感，対人関係障害，孤立状態，友達が少ない，自己中心的，反社会的行動，暴力的・攻撃的・破壊的傾向，チック症状などの悪癖・悪習慣，退行現象，学業不振など種類や程度も様々であるが，現在この不適応に悩む児童生徒，家庭，教師が多く，深刻な社会問題となっている。

子どもたちは，このような不適応として現れる心の中の問題―つまり，無意識に抑圧している攻撃性，怒り，苦痛の体験，悲しみ，恨みを基盤としていたもの―があることさえ気づかずに毎日を悶々とした気持ちで生活している。あるいは，自分の不適応による外的行動に悩み，苦しんでいる。

今回，筆者の一人である大澤は6年生（男子16人・女子16人・計32人）を担任した。このクラスの子どもたちはどの子どもも個性を持っており，それぞれの良さを持っている。にもかかわらず，自分らしさを素直に出そうとする子どもが少ないと感じた。また，何人かの子ども達が外的行動として現れる不適応の徴候を示した。

どの子どもも学級の中に位置付き，自分に自信を持って，あるがままの自分を素直に表現して欲しい。自分自身の心の中の問題に気づき，フラストレーションやストレスを解消し，積極的に生きて欲しい。どの子も，学級内でよりよい人間関係を体験し，好ましい自己概念を形成できるようにしていかねばならないと考え，コラージュ療法を学級活動の中に取り入れ，子どもの自己表現の機会を与えることにより，自己認識を高めようと試みた。

コラージュ（collage）とはフランス語で「にかわづけにすること」を意味する。この方法を心理療法に導入したの

* 岐阜県羽島市立竹鼻小学校
Takehana Elementary School
** 岐阜大学教育学部学校教育講座（心理学）
Department of Psychology, Faculty of Education, Gifu University

は森谷寛之（1995）や杉浦京子（1994）である。実際には新聞，雑誌，パンフレットなどの文字や写真を任意に切り抜き，それを貼り付ける方法である。この作業中，今気になるもの，よく分からないが好きなもの・嫌いなものが雑誌などの写真やイラストから選択され，画用紙などの台紙に貼られていく。それをなぜ選んだのかは製作者自身にも十分意識できていない，理解できない，言葉に表せないものもある。それらを手がかりにして自分の今の状態を考えてみると，思わぬ気づきを得ることができる。言葉では言い表せない感情が象徴的な表現として作品の中に表わされていることが分かる。それを簡便に，具体的に，豊かに表現できることがコラージュの良さである（佐々木・下山，1997）。

イメージは本人がよく分からないもの，意識できないものまでをも表現される。イメージに向き合うことで今まで自分の中で気づいていなかったもの，取り残されたものに出会うことができると考えられる。特にコラージュ制作では素材が具象的である。そのため自分の感情を投影しやすい。感情表現が苦手な者でも怒り・悲しみ・喜びなどの表情をはっきりとあらわした人物を貼ることができる。コラージュの素材が製作者を刺激し，本人が気づいていなかった内面の表現を促進する効果があるといえる。コラージュ療法は下山（1992）や佐藤（1998：1999）などにより基礎的研究も行われている。今回我々は小学校6年生の授業の中にこのコラージュ療法を取り入れ不適応傾向を示す2名の児童の変容を試みた。

方　　法

(1) 被験者

小学校6年生　男子1名A（非社会的行動傾向），女子1名B（不登校傾向），計2名

(2) 手続き

①マガジン・ピクチャー・コラージュ法

子どもが自分で使いたい雑誌・広告などをそれぞれに自由に持参することにした。また，あらかじめ教室にある程度雑誌を用意しておき，自由に使用することができるようにした。約1ヶ月ごとに4回コラージュを実施した。第1回，第2回は集団絵画療法，第3回は相互法，第4回は宿題法で行った。また，第4回を除いて，被験者の他に約30名程のクラスメートも同時に制作するという状況下で行った。

②台紙

第1回・第3回は画用紙，第2回・第4回は紙袋（コラージュ・バッグ）を用いた。

③交流会

制作した後，あるいは後日に約1時間程，学級で交流する時間を設けた。

第1回―自由交流

第2回―グループで交流（A交流用紙使用）

第3回―制作した2人1組で，別のペアと自由交流。交流中は，A交流用紙の1（受けた感じの表）を黒板に掲示しておく。（交流前にB質問紙，交流後にC質問紙実施）

第4回―交流当日に，クラスメートの中で話をしていない人と交流。その後，自由交流（交流前にD質問紙実施，E交流用紙使用）

なお，被験者はクラスメート30名程と一緒に交流会を行った。

A交流用紙

1．（　）さんのコラージュ・バッグを見て，うけた感じはどうですか。相当するものに○をつましょう。相当するものがない場合は，受けた感じを空らんに書きましょう。いくつに○をうってもよいです。

①うれしい	②悲しい	③楽しい	④さびしい
⑤気持ちいい	⑥気持ち悪い	⑦元気がいい	⑧元気がない
⑨おだやか	⑩おだやかでない	⑪こわい	⑫力強い
⑬弱い			

2．（　）さんのコラージュ・バッグを見て，意外な一面に気づいたというようなことはありませんか。

B質問紙

［コラージュを2人で作って］

①作りながら，2人でどんな話をしましたか。

②ペアの相手は，普段からよく話をする相手ですか。

③一緒に作ってよかったなあと感じることはどんなことですか。

④一緒に作っていやだなあと感じたことは，どんなことですか。

C質問紙

［コラージュ発表会を行って］

①友達からどんな感想を聞きましたか。印象に残っていることを書きましょう。

②友達の感想を聞いて，あなたはどんなことを思ったり，

考えたりしましたか。

D質問紙
①作品名（題名）
②一緒に作った人は誰か。
③家族と一緒に作った人のみ―作っている時，話したこと
④自分一人で作った人のみ―作っている時，考えたこと

E交流用紙
1．（　）さんのコラージュ・バッグを見て，受けた感じはどうですか。また，相当するものがない場合は，受けた感じを空らんに書きましょう。いくつに○をうってもよいです。

①うれしい	②悲しい	③楽しい	④さびしい
⑤気持ちいい	⑥気持ち悪い	⑦元気がいい	⑧元気がない
⑨おだやか	⑩おだやかでない	⑪こわい	⑫やさしい
⑬力強い	⑭弱い		

2．（　）さんのコラージュ・バッグを見て，意外な一面に気づいたというようなことはありませんか。

結　　果

(1)　非社会的行動傾向のみられる男子児童Aについて

家族歴

父親，母親，弟の4人家族である。父親は，会社員で帰りが遅く，母親も平日夕方5時頃までパート勤めをしていて，日曜日も出勤のため両親共に家を留守にすることが多い。母親は，家庭訪問でAが学級に馴染めていないことを心配していた。Aが持つ非社会的行動傾向については気づいていないようだった。

担任のAの捉え

4月当初，表情は暗く，鋭い目つきが気になった。

理科の授業では突然「心筋梗塞・脳梗塞」など死と直結するような病名を叫ぶことがあり，情緒的な不安定さを感じた。

休み時間は，1人で本を読み，学級の友達とかかわろうとしない。その一方で，児童会の組織で中心的役割を引き受け，活発に活動する姿も見られた。

Aは，嬉しくても，辛くてもあまり感情を表に出そうとしない傾向がある。素直に自分を表現することに「照れ」があり，みんなのお手本となるようなことをすることが，「かっこわるい」という価値観も持っているように感じた。

話をする中で，幼い頃から両親が留守がちで大変さびしい思いをしたことから，さびしがりやで，1人になること，友達を失うことを大変恐れていることや母親に対する愛着が強いこともわかった。

非社会的行動傾向が，5月から6月にかけて頻繁に見られるようになり，その都度担任から注意を受けるが，本人はあまり重大なことと感じていないようだった。特に，6月には火遊びを繰り返したため，母親と担任とでよく話し合い，Aを見守っていくことを確認し合った。

その日を境に，運動会の応援団に立候補し，真面目に練習に取り組むなど，前向きな姿が見られるようになったため，学級内でもっと自分を素直にさらけ出すことができたら，学級がAにとって更に居心地の良いところとなると同時に，非社会的行動傾向も減少すると考え，コラージュを行った。

第1回コラージュ　作品1

制作しながら，ニヤニヤとした笑みを浮かべながら，貼るパーツをじっくり探し，切り取っている。制作を嫌がる様子はなく，むしろ楽しそうに見えた。

全て貼ってあるパーツは，TVに出ている人物で，しかも笑いを誘うキャラクターの人物がほとんどである。ひとつひとつのパーツが小さく，余白の部分が多いことは，まだ自分を表現することにためらいを感じているからであろう。しかし，パーツそのもののインパクトが強く，Aなりによく吟味して制作されたことがわかる。

また，一番左下のパーツと一番右上のパーツは，どちらも強い男性のイメージと人を笑わせる部分とがうまくミックスしたパーツで，Aが持つ理想の姿を推測させる。題名を「ぼくの珍鳥物語」と書き，台紙に8つ切りの大きさを選んだ。

交流会では，男子9名女子3名計12名と交流した。交流した児童の感想として，「お笑いが好きなんだね」「いろいろな人のファンんんだね」「組み合わせがとてもいい」というポジティブな感じを持った児童ばかりであった。

第2回コラージュ　作品2

Aが憧れている歌手をそのまま貼ってある。題名を「ビジュアル」としたが，このビジュアル系といわれる歌手は，激しい音楽と共に，奇抜な色づかいの衣装や化粧をしているのが特徴で，Aの溢れんばかりのエネルギーを思わせる。また，作品の意味を尋ねたところ「かっこいいところを強調した」と答えた。

バッグの片面だけではあるが，画面いっぱいにパーツが

貼ってあり，余白が作品１よりも減少していることから，以前よりも自分を躊躇せず表現できていると思われる。

交流会は，教師が意図的に作ったグループ，男子２名女子３名計５名と行った。Ａ交流用紙の１では，ポジティブな感じを選択した児童が多く，Ａは友達に認められたことを実感することができたであろう。しかし，その一方で１人の男子が，ネガティブな感じを多く選択していた。また，２においても肯定的な評価が多い中で，否定的な評価があり，Ａにとってこの両極する評価は意外なものだったことが，交流後の「ぼくは，変なんだ。」という感想から伺える。

ａ．Ａ交流用紙の１で選択された項目
ポジティブな感じ
③楽しい　３名　⑦元気がいい　４名
⑫力強い
ネガティブな感じ（全て１名）
②悲しい　④さびしい　⑥気持ち悪い
⑧元気がない　⑩おだやかでない
⑪こわい
ｂ．Ａ交流用紙の２で書いた内容
・漫画の切り抜きじゃなかった。
・ビジュアル系が好きなんだな。
・どういう人が好きかよくわかった。
・かっこいい。
・なんではったのかな。

第３回コラージュ　作品３

最初から最後まで，雑誌に触らない２人の間は，約50cmほどの距離がある。口先でペアの友達に指示を出し，切り抜かせたり，貼らせたりする。「Ａくんも切ったり，貼ったりしたらどうなの。」と穏やかに語りかけたが，「めんどくせー。」とだだをこねるような口調で返答する。Ａが，「それを切って貼ろ。」といい，時々２人で作品を見てけらけら笑う。題名を「値下げ」とする。

文字が多く，一瞬見ると訳が分からないが，声を出してみるとそのリズムの良さに気付かされる。流行の言葉，インパクトの強い言葉，歯切れのよい言葉が使われていて，文字であるにもかかわらず大きな声で叫んでいるように感じられる。作品３の仕上がりを見ると，Ａの力が大きく働いていることを感じさせる。

作品３を見ると，仏の周りに「とことん～」という言葉を曼陀羅のように並べ，半分に切った本物なら使えそうにない携帯電話を仏の耳にあてている。そして，「スーパー特価10円」と宣伝する。

「仏」という威厳があり崇拝すべきものと壊れた使えない「携帯電話」とのミスマッチが，Ａの心の中にある一端を表していると感じる。つまり，Ａの心の中には「逆らえないもの」と「逆らいたいもの」も両者が混在していて，その矛盾した両者と正面から向き合うことが怖くて，笑いにすり替えたり，ごまかしたりしていると考えられる。

また，Ａの自ら手を下さない姿勢，友達に甘える姿勢が制作過程の様子から推察できた。

交流会は始め，２人１組のペアで別のペアから感想を聞く。一通りペアでの交流が終わったところで自由交流を行った。

Ｂ質問紙の回答にあるように，２人は「時々，話をする」間柄だが，制作過程で相談するうちに少しずつ共通のおもしろさを見つけ，楽しむことができたと推察できる。また，２人で完成できたという達成感も感じることができたと思われる。

Ｃ質問紙のＡの回答から，制作中から交流会のこと，つまり友達に見せるということを強く意志していたことがわかる。中でも，選んだパーツが女子に人気の高いアイドルタレントであること，それを「値下げ」という言葉で飾ることから，女子の評価を重視し，注目をあびたいという意識が感じられる。

Ｂ質問紙の回答
〔Ａの回答〕
①どのようにはるかなど。　②時々，話す。
③一緒に相談ながら作れた。④なし

Ｃ質問紙の回答
〔Ａの回答〕
①タッキーの値下げは，ひどい。
②Ｊｒ．の値下げはしない方がいいなぁ。

第４回コラージュ　作品４

作品の仕上がりから穏やかな気持ちで制作したことが推察される。Ｄ質問紙で，母親と弟と一緒に制作したと答えていることから，いかにＡにとって家族が重要な存在であるかを物語っている。あまり話をしなくても，側にいるだけでＡの気持ちは安らぐのであろう。

今までの奇抜な激しい色はなくなったこと，「お笑い」の表現だけではなくなったこと，人物の顔が穏やかな表情であること，余白とパーツの広さのバランスがよくなっていること，文字がなくなったこと，バッグの２面と底に貼ってあることなどから，Ａの心の安定感を確信する。

Ａと親しければ親しいほど，今までのイメージとの

作品 1

作品 2

作品 3

作品 4

作品５

作品６

作品７

作品８

ギャップを感じたであろう。交流会では，一人の男子がネガティブな感じを持っているが，それは，今までのAの持つイメージとのギャップ及び貼り付けたパーツが，女子が好みそうなものであったことからであると推察する。

交流後に「いろんな人に興味があるとか，あまりぼくのことを知らない人が多いんだな。」と感想を持っていることから，「自分はまだまだ，いろんな面を持っているんだ。もっとみんなに知ってほしい。」と願っていると思われる。自分の色々な面をコラージュを通して少しずつ表現していく内に，少しずつ抵抗がなくなっていたと考えられる。

a．E交流用紙の1で選択された項目
　ポジティブな感じ
　①うれしい　2名　③楽しい　4名
　⑤気持ちいい2名　⑦元気がいい1名
　⑨おだやか　2名　⑫やさしい　1名
　⑬力強い　1名
　ネガティブな感じ（全て1名）
　⑥気持ちが悪い　1名
b．E交流用紙の2で書いた内容
　・いろんな人が好きなんだなぁ。
　・意外と芸能人に興味があるんだな。
　・こんなのに興味があるんだなぁ。
　・おもしろ好きだ。
　・家族で楽しく作ったんだな。
　・お母さんと楽しい会話をしたんだな。

(2)　不登校傾向及び友達関係で躓きを示す女子児童Bについて

家族歴

父・母・姉・弟の5人家族である。母親の性格は穏やかで，相手の立場や気持ちをよく考えて話をするタイプに感じた。姉は，高校受験を控え，弟は生まれつき体が弱く入院することもあると聞いている。母親の話によると，父親は子煩悩である。

担任のBの捉え

下級生の面倒見がよく，グループのリーダーとなり友達や下級生に大きな声を出して指示をするなど，大変活躍することが多かった。

5年から6年に進級する時，新しい学級編成になったが，幼なじみの女子児童C・Dと同じ学級になり，友達作りで悩む必要がなかった。休み時間はCと一緒に遊ぶことが多く，帰宅するときは3人一緒が多かった。友達と遊んでいるときは，明るく開放的で，元気な姿が多かった。

しかし，その一方で，几帳面で真面目すぎる性格も感じられた。担任に対して「できない」「やりたくない」と言うこともなく，愚痴をこぼしたもしない。黙々と自分で仕事や学習課題に取り組み，最後までしっかりやり遂げなければならないといった思いが常に感じられた。また，友達が困っていたり，戸惑っていたりすると黙ってみていることはできず，結局Bが代わりに仕事をしていることも多かった。

しかし，2学期の10月に入り不登校傾向を示すようになり，11月には友達関係に躓くようになった。

第1回コラージュ　作品5

一つひとつが小さく，縁にぴったり沿ってはさみで切り取られたパーツが多い。題名は「私の好きな物」余白が多く，パーツが羅列的に貼ってある。穏やかさ，子供っぽさを感じる。「おやつ」や「キャラクター」の中に「機械」が入っていることは不調和と冷たさを感じる。淡い色が中心であるが，マニキュアの爪だけが赤く，視線がここに集まってしまう。また，ここには大人っぽさも感じる。

この第1回コラージュを行った約3週間後に，不登校傾向が見られるようになった。その経過は，以下のようである。

不登校傾向の経過

風邪を理由に欠席をした。次の日から登校をしぶるようになった。母親が，原因を本人から聞き出そうとするが，Bは，給食を全部食べなければならないのがいやだというのが一番具体的な理由で，あとは何につけてもいやだと言うだけで，はっきりしなかった。

給食についてはすぐに対応し，他にBがいやだと思う障害はできるだけ取り除くようにした。

何とか登校を続けることができたが，担任と目を合わせることはなく，どことなく無気力であった。

第2回コラージュ　作品6

第2回コラージュは，不登校傾向が見られる時期に行った。

全体ににぎやかで明るい印象を受ける。第1回のものと比べると大きいパーツを選び，バッグの中や底といった隠れた部分にも意欲的に貼っている。色彩的にも情熱やエネルギーを感じさせる赤が多くなった。

また，交流した児童がA交流用紙の1でポジティブな感じの6項目全てを選択している。また，2の回答から「自分には色々な面を持っている。私は，まじめだけではない。」というBの思いが友達に伝わったと思われる。従って，Bなりの自己表現ができ，満足する事ができたと思われる。

しかし，幼い子に人気のキャラクターと年相応のキャラクターとが混在していることに違和感を感じた。この疑問を本人には直接ぶつけず，ちょうど個人懇談会の開かれる

日であったため母親に尋ねた。

個人懇談会で，母親は，「家庭の問題が，今表面化している。」と話し，姉や弟に手が掛かり，小さい頃から余り手を掛けられなかったことを振り返り，今Bへの対応を家族全員で変えていることを話した。また，キャラクターの疑問については弟と姉が好きなキャラクターであると語り，「やはり，家庭の問題ですね。」と母親はつぶやいた。

この日を境に，Bの精神的な不安定さは次第になくなり，給食は残すものの苦手なドッジボールにも積極的に参加するなど以前の弱々しい印象は消え，むしろ力強い印象を受けるようになった。

a．A交流用紙の1で選択された項目
ポジティブな感じ
①うれしい　3名　③楽しい　5名
⑤気持ちいい4名　⑦元気がいい　4名
⑨おだやか　2名　⑫力強い　1名
ネガティブな感じ
⑬弱い　1名
b．A交流用紙の2で書いた内容
・かわいいキャラクターが好きなのだな。
・意外に，ウルトラマンが好きなんですね。
・中にも貼ってあって，工夫している。
・アニメが好きなのか。

第3回コラージュ　作品7

Bが幼なじみといって仲のよかった2人の内，Dとは全く接することがなくなった。以前，担任がいじめについて話をした時にDが「私も，以前いじめていたから今逆にいじめられている。」という内容をノートに書いていたことから，2人の間に何かトラブルがあったことが予測された。そこで，第3回ではBとDのペアで行った。

2人の間には，4，50cmの距離があり，進んで話をすることはない。Dは，Bを見つめるがBが視線を合わせることはない。Dは，黙々とパーツを切って集める。Dは，Bの指示を待っている様子で眺めている。

15分ほど経過すると，2人の距離が少し縮まり，DからBへ恐る恐る話を切り出した。すると，Bもそれにちゃんと答えて話をした。まだ，両者とも作り笑顔だが，少しだけ関係がよくなった手応えを感じた。担任が近づくと，Bが「これを一つの部屋にしてもいいのですか。」と言う。「いいよ。2人の部屋にするんだね。」と言うとBが「ふふっ」と笑う。　テーブルの上にジュースが2つ置かれている。黄色の椅子にB，その向かいにDがそれぞれ座っていると考えられる。また，テレビの位置がテーブルから見られるように工夫されており，2人が椅子に座っていると仮定すると同じテレビを見ていることになる。今までそっぽを向いていた2人の関係から少し脱却したと思われた。

パーツはほとんどが家具で，家具の色のカラフルさとその穏やかさとが明るい雰囲気を作り出している。ほとんどのパーツが縁にぴったり沿って切り取られていることから，Bが中心になって作られたことわかる。Bの方が，Cより力関係の点で強いことがわかる。

この日，久しぶりにB，C，Dの3人が一緒に帰宅する姿を見た。Dは，2人の後をちょこちょこついていった。

その後，再びすぐに一緒に帰宅することも，会話することもなくなった。Bの心の中にまだ何かわだかまりがあると感じた。

第3回コラージュを行って約2週間後，Dが「Bがにらんだり，聞こえる声で悪口を言ってくる。」と訴えてきた。そこで，BからDに対するの思い聞くために，Bと担任が直接話をすることにした。

その時の会話の内容は，次のようである。

T：前，コラージュを2人でやったことあったでしょ。あの時のペアはDさんだったよね。前，Cさんと一緒で幼なじみって言ったよね。でも，質問紙に，「時々，話す」に○が打ってあったけれどどうしてなの。一体，Dさんと何があったの。
B：（直後に大粒の涙を流しながら）いじめちゃいけないってわかっているんだけれど，どうしてもやってしまう。昔，4年生ぐらいの時CさんとDさんとよく遊んだんだけれど，その時Dさんに私いじめられていたことが忘れられなくて，どうしてもいじめてしまう。
T：そうなの。でも，コラージュの時は2人で楽しそうにやっていたじゃないの。
B：2人の時はいいんだけど，他の友達がいると，私とDさんが喧嘩していること知っているし，陰で私がDさんのことを悪口言っていること知っているから，もし私がDさんと仲良くしたら，「何で仲良くしているの。」と言われそうで，それが怖かったからみんなの前ではわざといじわるをしてしまう。

この後，担任を含めてB，Dの3人で話し合いの時間を持った。互いに自分が反省すべき点をそれぞれ語り，仲良くしたい気持ちがあることを確かめ合った。

この日，B，C，Dの3人は横に並んで帰宅した。

B質問紙の回答
〔Bの回答〕

①どんなものを置くか。
②時々，話をする。
③たくさん話せたのでよかった。
②なし

C質問紙の回答
〔Bの回答〕
①おもしろい。楽しい。
②うれしいと思った。こうやって部屋にしても楽しく思えるんだ。これからも，ただアイドルを貼っていくんじゃなくて，みんなと違うことをやってみようと思う。

第4回コラージュ　作品8

「話をしていない人」の中にDの名前が含まれていた。このことは，まだ，2人の関係が十分修復されていないことを示し，B自身もそれを自覚したよい機会となったであろう。

作品に貼られたパーツは，前回までのかわいらしいイメージ，やさしいイメージのものは少なく，道路標識のような普段のBからは想像できない奇抜なものを選択している。これは，「みんなと違った自分」を見せたいという思いと自分をこんな風に見せたいという思いの表れであろう。また，パーツの1つである道路標識には「進入禁止」と「一方通行」という文字があって，Bの複雑な心理状態をうまく表していると感じる。

交流会において，ポジティブな感じを選択したのは，ほとんど女子で，ネガティブな感じを選択したのは全員男子である。男子よりも女子の方が親密な関係であるため，Bにとって男子の評価はそれほど重要な価値を持たないと思われる。

色彩的には，黒や茶が使われていて，どことなく暗い印象も受ける。切り方についても，今までのようなぴったり縁に沿って切ってあるものと，そうでないものとあり今までより開放的な印象を受ける。また，自らの意志決定がはっきりないと切れないパーツもあり，Bの積極性が感じられる。ただ，「ひまわり」の色が何とも不気味な感じをかもしだしていることから，Bの心の問題をこの「ひまわり」が直接表していると思われる。

a．E交流用紙の1で選択された項目
ポジティブな感じ
①うれしい　2名　③楽しい　3名
⑤気持ちいい1名　⑦元気がいい　5名
③おだやか　2名　⑫やさしい　1名
⑬力強い　1名　さわやか　1名
ネガティブな感じ
④悲しい　2名　④さびしい　3人
⑧元気がない3名　⑭弱い　1名

b．E交流用紙の2で書いた内容
・お菓子が好きなんだね。
・「ちょきんぎょ」と「おかだ」の組み合わせがなんだかうれしい。
・とても楽しそうで工夫してあってよかった。
・とてもおもしろい。

考　察

非社会的行動が見られるAであった。Aは，寂しがり屋で友達が欲しくてたまらないと言う気持ちを持ち，他より目立つことで自分の居場所を作ろうとしているだけで，本当は素直に気持ちをさらけ出したい，ありのままの自分を友達に認めて欲しいと思っていると感じた。

特に，1学期のAは，学級の友達がいないと言うよりは，友達の作り方がわからないというように見えた。どんな自分をみんなに表現したらいいのか，戸惑っていたのであろう。

第1回から第4回までのコラージュ療法の作品を比べてみると，明らかにその変化に気付く。たとえば，パーツの数は増え，余白が徐々に少なくなっている。また，4回ともパーツの種類に違いがあり，回を重ねるごとに作品に込められている強い思いが感じられるようになった。

まだ，自分をさらけ出すことに照れのある第1回の作品は，人を笑いに誘うパーツが多いが，第2回になると自分の好きな歌手をそのまま貼り，自分の持つエネルギーを作品に託すようになってきた。もう，そこには照れはなく，自分を素直にさらけ出そうとする姿勢を感じることができる。第1回の自由交流の時に見た友達の個性的で，屈託のない飾らない作品やAの作品に対するポジティブな他者評価が，Aの自信につながったことと思われる。

また，第3回では相互法を取り入れたが，この時，Aは特に親しいわけでもない友達と笑いを通じて折り合いをつけようとした。「口先で協力」し，甘える姿勢を保ちながら制作を続けていった。このことから，まだまだ人との関わり方に課題の多いAであることを実感した。ただ，作品の中に女子に人気の「アイドル」を組み入れて，交流会の友達の反応を楽しむという意図も感じられ，Aなりに自分から仲間と関わろうと工夫していることも感じられた。

Aにとって，一番意味深いのは何と言っても第4回であ

ろう。宿題法を取り入れたコラージュで，母親と一緒に制作したことは小さい頃に「我慢強く」生活し母親への愛着が強いAにとって大変意義のあることだったと思われる。第4回の作品は，穏やかな表情をした人の顔が大変多く，そのパーツの大きさも余白のスペースも大変バランスがよく，色合いも優しい印象を受ける。特に，第2回の作品と比べると，その違いがよくわかる。制作中，「特に何も話さなかった。」とAは述べているが，一緒に制作するだけで母と子が心を1つにできたことが作品から十分感じ取ることができる。

今まで制作したAの作品から想像もできないような第4回の作品を，Aが躊躇わず友達に見せたことは，驚くべきことであろう。恐らく，1学期のAであったら，恥ずかしいという感情が邪魔をして友達に見せようとしなかったのではないだろうか。また，交流会の後，「いろんな人に興味があるとか，あまり自分のことを知らない人が多いんだな。」と述べているが，この言葉から，自分をさらけ出すことに気負いがなくなっていて，もっと自分の本当の気持ちを知って欲しいという思いが伝わってくる。

このようにコラージュ療法を通して，Aは少しずつ自分を表現することに抵抗をなくし，むしろ色々な自分を知って欲しいという思いを持つほどに変化していった。このように，コラージュ療法は，学級においても自己表現を高める効果があることがわかった。

1学期，真面目でリーダー性があり，友達のことを思いやって行動していたBが，10月不登校傾向になり，11月にはいつも一緒に遊んでいた幼なじみの友達をいじめるようになった。

不登校傾向になる少し前から，タイミングよくコラージュ療法に取り組んだことになりBの心中を探るのに大変都合がよかった。

第1回を行う前から，担任としてBが元気がなく気力がなくなっていることに気付いていた。そして，そのことを第1回の作品から何となくだが確認することができた。

また，Bの几帳面な性格は，どのパーツの切り方から感じ取ることができた。几帳面な性格のBだからこそ，日常のちょっとしたことに「フラストレーションや葛藤」を感じたのであろう。そして，どんな複雑なパーツでも丁寧にきっちり縁に沿って切ってしまうような我慢強さや真面目さが，辛いとかいやだという感情を抑えてしまい，さらに過剰な「フラストレーションや葛藤」を生んだのであろう。

また，第2回では，コラージュ特有のパーツの意味が具体的で深いという点が生かされた。始め，作品に貼られたパーツがあまりに幼稚なものであったため，担任はその意味を理解することができなかった。しかし，個人懇談会での母親との話し合いを通じて，それらのパーツがBの姉と弟の好きなキャラクターであることが明らかになった。そして，担任も母親もBに対してどのように接していったらいいのか，具体的な方法や方向を考えることができた。このような素早い対応が，Bが不登校傾向から立ち直らせる結果に結びついたのであろう。

この第2回では，Bが自己認識するという段階までいっていないものの，Bの無意識の領域が十分に表象され，治療的意味で大変有意義なものになったといえる。

さらに，第3回では相互法を取り入れ，Bと幼なじみのDとのペアで制作した。このことは「なぜ，だめだとわかっているのに，Dをいじめてしまうのか。」という重大な問題を考え解釈する時に，役立てることができた。つまり，2人きりの時は，いじめる気にはなれないし，むしろ優しくできるのに，「友達の目」があると「いじめなければならない」と思ってしまう。相互法を取り入れたコラージュ療法なしでは，Dに対する感情を整理することはできず，2人の関係はいつまでも悪いままであったであろう。Bは，Dと作品を制作しながら冷静に幼少からのDとの関係について考えたり，自分の感情を整理するなど，無意識の中に抑圧されていた怒りや恨みなどにD自身が改めて気付き，現在の自分の行為を振り返ることで少なくとも「いじめる」という行為は，改善することができた。このように，第3回ではコラージュ療法を通して，自己認識を深めることができた。

著者らはコラージュ療法を行うことが今回初めてであり，全く手探りの状態で始めた。そのため，作品の中に込められたメッセージを十分受け取る力が，まだ十分でない。つまり，せっかく作品に託された子供の思いを見逃してしまっている可能性が考えられる。

また，本研究では，学級における集団絵画療法として行ったのだが，その方法，教示の仕方，交流の仕方，その用紙の内容・形式など検討すべき点が多い。特に，集団として捉えた場合，自己認識を深められることや自己表現力を高められることをどのような方法で確かめ，表現するとよいのか，検討していかねばならない。

参考文献

森谷寛之・杉浦京子・入江茂・山中康裕　1993　コラージュ療法入門　創元社

森谷寛之　1995　子どものアートセラピー　金剛出版

佐藤静　1998　コラージュ療法の基礎的研究――コラージュ制作過程の分析，心理学研究，69，287-294.

佐藤静　1999　コラージュ作品構造と素材図版の推移連鎖構造の分

析，心理学研究，70，120-127.
佐々木一也・下山寿子　1997　コラージュ療法の解釈学的基礎づけへ向けての一構想　立教大学教育学科研究年報，41，17-36.
下山寿子　1998　コラージュ療法におけるカウンセラーの表現，立教大学教育学科研究年報，42，181-190.
下山寿子　1992　訪問面接にコラージュ療法を試みて――表現とかかわりの促進として，立教大学教育学科研究年報，36，53-64.